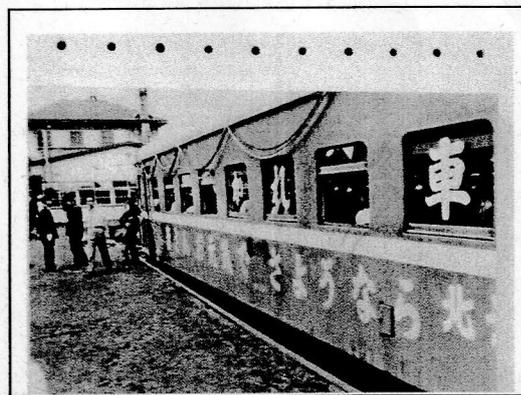


北海道拓殖鉄道 学習レポート

鉄道によって栄えた町

鹿追町を走っていた拓殖鉄道。私たちの住む瓜幕も、この拓殖鉄道（通称：拓鉄）のお陰で栄えたといっても過言ではない。「瓜幕駅舎記念広場」で、瓜幕に鉄道が出来た頃からの町に住んでいる堀川さんに話を聞いた。「木材の集積所がこの辺にあった。菅野温泉に向かう途中にある発電所の奥から木を伐り、この近くにあった木工所で板や柱に加工していた。昔は機械がなかったので、とても大きい木を人の手で積んでいた。」瓜幕を走っていた拓鉄は、人だけではなく、荷物や木材、砂糖の材料であるビートなども運んでいたようだ。そのお陰で、昔はたくさんのお店や工場などもあったらしい。「昔はありとあらゆる店があった。今は寂れてしまったけれど、若い人たちが昔のことを知ろうとしてくれることはとても嬉しい。」それにしてもこんな大仕事を成し遂げた拓鉄がたったの40年で全線廃止、現在ではほぼ線路や駅があった形跡を発見するのも難しい。時代の流れとは斯くも早いものか。



8622号に寄せて

拓鉄について調べる意義は、最初あまりわからなく、興味もわかなかった。しかし調べて色々知っていくうちに、「鉄道マニア」と呼ばれる人々の気持ちが何となくわかった気がした。まず昔の「機関車」は形がカッコいい。私たちが見に行ったら、鹿追町にある8622号は、保存状態もよくマニアの間では有名な地らしい。私は小さい頃からこの町に住み、この周りでよく遊んでいたが、昔と相変わらず堂々として立っていた。小学生のころからから大きいなあと思って見ていたが、大人になった今でも車輪の大きさはちょうど私の身長と同じくらいである。どれだけ時代が進んでも、古き良きものや先人の歴史を大切にしたいと感じた。

あとがき

今回拓鉄についてレポートにまとめてみて、とても拓鉄についての考えが深まった。また、郷土の歴史を調べたり知ることによって、自分の祖父や祖母、その前の先祖の暮らしや時代に興味をもったり、思いを馳せることができた。時代はどんどん変わっていくが、自分たちが大切にすべきものをもう一度考え直す、良いきっかけとなった。

